



鎮火用心集

全



服部文庫
117
1659



まゐり又ハ移つて宛あつてもらひそく乃
火のりきあひゆかより火氣内へを
いぬものなり予救夜の火をにた先
一現成悉くやきさうおぼへあまらあり
扱つら戸のまきささぬるよハかひて蒸の
戸まゝの移りごとと柄子入るく煙あはれ
ちしそくまゝ中を水くげ用は
まゝのなり具あつてなくしてとて

あつた味をてぬる一はりつひく
石仕りもろくんたをせおくなまゝ
一 築しば家法と入志まひておはき板と
ろくまゝして泥紙とすまはあくかけ
ろくまゝとて及ぶあき
まゝのりく板と
まゝのりくあり砂とまゝ人の集まかけ
上子少ゆけまゝ身には非入るくかくなま
なり

大用

〇

えときて竹とどろちの酒を命と
ふくつも雀一煮て焼めと人を解
融のつらむびのくげ物との痛くとの
まゝ火よりおぼれにん女とまゝの
かすのつらむ平をおぼして人とな
しるまじくなき事なり

一 火あしれよ侍くよきたるもの見
たうさくく其まじく人

一 夜守けてお火を外急あつりとも戸と
たまてもむとと戸をくくたうす戸
とよくわらねが押し狼藉のつらむなり
とす及ぶゆあり根子とまゝとやて火を
灯してほめひくべーお火急あつり
兼て定あきあつり。おららそくはまて
そららそくはまて事なり

けさる故子辰くと花火家子編りて火の勢
 ころん成り土流の妙宝もてやま共よりま
 あらみく歌を著しと故子年生何れも
 ありまづつ女附よけ程く能くまありて
 わしめ花火とぞく清と半肝ある
 るんきし事

一 土流のまゝ人の墨地の石と土掘りて
 火をかりよとぞく甚家の家紋も應ド

二 なるころんはあうりに四人もおまげて
 墨 「あひかりまき」 出火の甚甚解し押解
 てるやとがまのうめよおまき定とらま
 かく廻風吹まぬ核よ程とつあき合
 なるくまると廻へ墨とまてん古流の
 けりまよき物とあしとまのうと志高りも
 能く人の用とまよし上る又西ま
 て流のまき人の皆右の解とお意よこし

かつゆいゆい及まてせき合ふ急子わけ
 来る何れも権力のまき合ふかへんまき
 かつまれば是非多く打とて遊ばる
 校庭のまき及くる事へ女子女と人
 可ふにせむいよく少くからく入
 て只せうあつぬ先まて中おひく
 野原あつる事なり

一 車長持も持を多く集るる人ら
 ほかやう紙帳とちうま物まき火のせり
 それと物と今くまきくむらに
 のせりし物と今く又くすまうれ小に
 と切まきてかまき事おお入られと
 持ちあつた者へむらにのせり
 かつまきまうらつと早業まて勝
 かつまきまうらつと早業まて勝
 かつまきまうらつと早業まて勝
 かつまきまうらつと早業まて勝

又見れぬもの之故子火とたたく時ハ海
 子氣と解火の揚りやまきぬぬに
 知のけあ火際ゆふまのらく多びく
 水けけけーかまごうれか火極度守
 及び平も免るゆま死ーおろりの焼く
 氣のけあ火際ゆふまのらく多びく
 水けけけーかまごうれか火極度守
 及び平も免るゆま死ーおろりの焼く

板中綿衣打付る位切ぎびて焼火
 板中綿衣打付る位切ぎびて焼火
 板中綿衣打付る位切ぎびて焼火

一 唐汁合羽たを入替て油火引ら物
 と目おけくさめがらに包こめぬまに必
 ち氣も焼ぬぬのこやぬま延
 と打急叩一つけ流まへ一是又つづく
 ちも焼ぬぬのこやぬま延

更なる時と志まひ入てまゝ出ぬはふらさ
申すなり

一本少座よりのお火阿くまゝのちりあえ
ハシ屋の火字結ぶ丸く早く拵け
入らぬへ平生むくにうく列くおま
先去入るにひらけへ一おまよふま
りらししななき事一

少座よりあつり身一是ハコらわくたを
んどと焼てこ中にまゝに火氣さめん
とおひて拵り足なりこの火のま
きゆれぬも中子木の柱などありて
火れ結ぶころと志まひて早く拵け
なり一あも庭子さ通てやろまひ火
ふあや一まゝなり

一火種よりのお火つとも板屋を

とお付目ひてそのまゝ火くら箱と柳上
かゝるをそれ彼火口より日押とのいぞ
柳より火子やけらつる時よりありま
乃ち屋訓とあくなつて忘れざる年おたり
也子おくら箱あらくあぶあはしくま
おの桐栗板まきまき一又おくら入の
肉とらひ子まえらる時いまうしその火災
の極てまますまきこし是とらう考て

一 在り町子ゆびまきこいんあつらひの一人者
まの松あふや本葉かん子層の敷と焼
きして不器まき出火とあふき又ねあ
有し事こかひて字わく其たき物を
不のりいしあて焼なまき入り入物子
此分持ありまきたく時いたく火を
あまきこいおるとも火のうつるまき物

くふたろくしん成るるべし
つられ身ざらゆあり

一 仲成せんが茶と練とる其の
とそごに垂りあつた火つて

早くあつとまぐーあつてあつてかく
まぐのちとあわぐり金想けつと

一 のくかひのうたはくまき事あり
作事せむたごき事と定あつて

その介由金場一火とつらつらと
あひまき事

一 紙福をまきあてほつと火と居る
眼くまふたごー常く格とまのけ

一 打あんのふと月あつてあり
手代りくあつてあつてあつて

火成其まき焼くまつてあつてあつて
吞べつとすつとひきあつてあつてあつて

幸夜すおびんころひておき
人くよら^つま^かあうけしむたき
る

一 飯屋の内へなまの火と入ぐずい^キを
かやろ^ろら^入酒^子碎^るさひれ^ら府
おひ^て飯^のま^ま火^の揚^る年
わろ^{もの}こ^と火^をと^きん^物も^な
お^く切^りお^く一^さら^う落^るら^うと^お意

ま^ま火^の揚^る年^は
お^のあ^もも^まら^が一^て防^ぐ一^ま
戸^で一^火の^まら^まお^な
ら^らの^まと^おけ^し防^ぐま^ま
一 防^屋を^らん^者案^わん^ども^から^れ
家^は人^のひ^て拍^子本^のお^の
と^梅出^火益^人お^とま^の時^お子
ら^らか^らと^け防^ぐ一^まて^お乃

ち解^{つひ}筆^ひ子^こ用^{もち}物^{もの}の^のか^から^らく^くして^{して}あ^ある^る使^{もち}こ^こも^も子^こ
ろ^ろの^のあ^あら^らし^しと^とや^やき^きの^の介^{かい}調^{てう}室^{しつ}
ま^まり^り兼^{かね}て^て志^しく^くして^{して}垂^たる^るま^まき^きる^る
一^一七^{しち}戸^こ代^{だい}子^こ泥^{どろ}と^とめ^めん^んと^とて^て能^よく^くあ^ある^る
長^{ちやう}事^じ終^{しゆう}二^にま^まい^い合^あひ^ひして^{して}二^に三^{さん}寸^{すん}高^{かう}さ^さに
も^もこ^こ三^{さん}十^{じゆう}文^{ぶん}子^こよ^よぬ^ぬい^い合^あひ^ひを^をか^かけ^ける^る
急^{いそ}ぎ^ぎら^らと^とほ^ほめ^めす^すよ^よけ^けい^いま^まつ^つと^とり^りま^まり^り
に^にら^らと^とし^しと^とわ^わぐ^ぐに^に対^{たい}は^は方^{ほう}と^と行^{ぎやう}す^す

て^てか^かの^のう^うぐ^ぐり^り糸^{いと}を^を懸^{かけ}そ^そろ^ろふ^ふや^やう^うに^に撫^なぐ^ぐ
初^{はつ}め^めか^かの^の足^{あし}の^の長^{なが}大^{おほ}津^つ切^{きり}又^{また}五^ご桶^け水^{すい}一^{いち}
斗^とに^に塩^{しほ}一^{いち}升^{しやう}一^{いち}升^{しやう}の^の糝^せり^り
に^に入^いか^かま^ま合^あせ^せ右^{みぎ}の^のも^もめ^めんと^とひ^ひこ^こして^{して}
か^かけ^ける^るも^もあ^あら^らび^びお^おと^と度^どを^を内^{うち}介^{かい}より^{より}
懸^{かけ}る^る一^{いち}七^{しち}戸^こは^はあ^あら^らし^しと^とて^てよ^よう^うに^にあ^ある^る
つ^つま^まら^らた^たみ^みて^て其^{その}う^うけ^け糸^{いと}の^の合^あひ^ひも^もん^ん
と^と板^{いた}札^さ子^こを^をお^おけ^けを^をら^らの^のも^もそ^そと^とす^す調^{てう}

室^{やう}ありあがりりらん干^か土^{つち}の粉^{こな}垣^{かき}と
その合^あ桶^づを入^いれとをりて逆^{さか}くに盆^{ぼん}
盆^{ぼん}記事

平生^{へいぜい}心^{こころ}愈^{なほ}重^{おも}盆^{ぼん}事

一 火^かくらぶとにつけ来^きとらうとくとそ
人^{ひと}の外^{ほか}毎^{まい}ら子^こおくべき事

一 盆^{ぼん}のま^まソリに薪^{たきぎ}を外^{ほか}火^かのう^うけり安^{やす}
と^との敷^敷一切^{いっけつ}おくゆ^ゆべき事

一 盆^{ぼん}の内^{うち}とを^をき^きん^んてか^かを^をせ^せ戸^とを^をあ^あけ^け福^{ふく}と
ともお^おく^くん^んてか^かだ^だん^んあ^あく^くあ^あく^く盆^{ぼん}べき事

一 用^{よう}水^{すい}天^{てん}水^{すい}を^をけ^けて^て妻^{つま}中^{ちゆう}の^の盆^{ぼん}の^の内^{うち}まで^{まで}二^に階^{かい}と
あ^あと^とあ^あと^とら^らま^ませ^せお^おく^くべ^べと^とを^をひ^ひあ^ある^る子^こ水^{すい}桶^づと
盆^{ぼん}教^{きやう}と^とお^おや^や子^こま^まと^とべき事

一 老^{らう}人^{にん}妻^{さい}子^し子^こく^く之^の際^{さい}へ^へき^き人^{にん}の^のま^まの^の衣^い裳^{しやう}を
お^おお^お盆^{ぼん}子^こん^ん昔^{かき}あ^ある^るま^まや^やう^うに^にく^く子^こお^おれ
ほ^ほい^い氷^{こおり}餅^{もち}の^の敷^敷と^と盆^{ぼん}子^こ入^いる^るむ^むり^りめ^めの^の三

と又火とふせぐ候りもかたき事

お火の名家あやしく見之を確りも水攻

く入ぬれむらと鋭くへき事

遠方のお火も風烈き風

多しれ候も及ぶ候に仕業志

くまじい風候も及ぶ候に仕業志

お火のお火も及ぶ候に仕業志

ひらきても切者も及ぶ候に仕業志

お火のあり候のは火の權の事にて

中候は火の權の事にて

候き事

お火乃言らるるまをてらん物とて

て見せ候も及ぶ候に仕業志

火事のせの働くもの大勢あり主人の四方

と云ふり民志づるあやまらあきやうに

興よりと柳舟でかき入る候に

とびまうーおくーとたひく多うけて松島
するーさもおれい出火とどりこれ心
きまもやまもあつたそれふりけり
うやくせしきくしんじしんじしんじしんじ
あつたのあり是ハ松島の方より下知
あつたのあり是ハ松島の方より下知
あつたのあり是ハ松島の方より下知
あつたのあり是ハ松島の方より下知

とん入るるへ他はさびしくすれは急
火敷焼まあつても甚まの居合を御向
りまては物なき事なり
一 ちりれさふやうと持てきまのあり
又後まふれ人よりは面二三百文は
お付いふ付人ともやまも合年一御
島月と知ド内室より
一 ちり場へ足舞まはるりと腰より

水桶みづかより取りまきまきの口の敷と拵たてして
 桶かの蓋ふたをまきのひかり 如ごとま能よひおろす年としの
 物ものとひかさんたあまびに焼やくす此この行ゆきはな根
 のくまきまゝの時 杖つゑをけくおとさる
 きり

一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

水みづをまきまきのひかり
 一 ちちの敷敷と拵たてして
 一 杖つゑをけくおとさる

子孫ふじくひて負首伐家さしひく伝説も
 わりし大火小及ぶて人の怪家人も多くらくぞの
 罪よやさん風烈のそれいそ家の事ら日夜火の
 しくんそ有那去要るそ代出する時いそそそ
 門はら火月んそそよそ二二返中そそ出さそそ
 神仏まそ法勅をそれ修り若にんごそあそもの
 火災此難いかそそとのと老の差別りり干時享和
 三年六月吉日 本石田四目大と所 本清板

古今 役者名物大金 金再

役者名人の義をそそ
 く譯したるものあり

青樓 舞臺とらうし 金再

是のむらさきをそそそそ
 時々のこととそそそそ
 そそそそそそそそ

長枕褥合戦 小再

おそそそそそそそそ
 おそそそそそそそそ

妓者虎乃巻 金再

おそそそそそそそそ
 おそそそそそそそそ

筋離文字 理 金再

初年天五すつりのあんどろ
 さらそそそそそそそそ

古今 役者 名取州 金再

大むらさき名人の役者そそ
 おとそそそそそそそそ

真女意題 全冊

國みゆりのおろしきあをひを
らりくもちをさかとも
ひのこひとす

狂舟百首抄 全冊

星六人のあめ舟のこめふ
るあめ舟をおりろくま
るるをみあり

松園女かた死討 全冊

是は屋上雲のあつせつを
くくくあつせつをのあり
上りるあつせつのお遠あり

古今 雙帝 全冊

け書はあやさむをあつせつを
おりろくまをさかとも
あつせつをさかとも

今昔探年代記 全冊

上りるあやさむをあつせつを
おりろくまをさかとも
あつせつをさかとも

三女之居後者評判記 全冊
評判記はあやさむをさかとも
あつせつをさかとも

